

丹羽 佑一先生を送る

経済学部長
藤井宏史

丹羽佑一先生は、2013（平成25）年3月31日をもって、本経済学部を定年により退職されました。先生は、香川大学にご着任以来、31年にわたり考古学分野で教育研究を続けてこられました。香川大学は、先生の在任中の多大なるご功績に対し、本年4月に香川大学名誉教授の称号をお贈りしました。

先生は、1947（昭和22）年10月に京都府綾部市でお生まれになり、大阪府立北野高等学校を経て、1966年4月に京都大学文学部に入学されました。そして、1971年3月に同学部を卒業後、同年4月に京都大学大学院文学研究科修士課程に進学され、1973年3月に同修士課程を修了された後、同年4月に同博士課程に進学されました。1978年3月に同博士課程を単位修得退学された後、同年4月に帝塚山大学考古学研究室助手、1980年4月に奈良大学文学部文化財学科講師、1982年4月に香川大学教育学部講師に採用されました。香川大学教育学部では、1983年4月に助教授、1991年4月に教授に昇任された後、1995年4月の大学改組により、経済学部に配置換えとなりました。

この間、香川大学教育学部で13年間、経済学部で18年間、合わせて31年間にわたり、全学共通教育の歴史学、学部専門教育の文化人類学、観光資源論、日本文化論等の教育研究において多大なるご貢献をいただきました。

先生の専門分野は考古学であり、研究テーマは「先史社会論」です。主に縄文時代から古墳時代を対象として、集団の構成・集落の形成等に焦点を合わせて、その特質を抉出してこられました。近年では、古代に香川地域で採掘されたサヌカイトの流通に焦点を当てて、先史社会における「経済」領域についても研究を進めておられます。これらは発掘作業という実証成果に基づいて行われた研究であり、発掘作業を通じて香川における考古学研究の裾野を広げ先導

してきた点についても多くの識者が認めるところです。とりわけサヌカイトの流通に関する研究は、科学研究費を得て行われており、その成果が期待されているところです。また先生は、イタリアのポンペイ遺跡（1993～2005年）やパキスタンのガンダーラ・ラニガト遺跡（1986～1989年）の発掘作業にも参加され、海外の考古学研究にも寄与されるとともに、所属されている日本考古学協会では、理事や査読委員（2004～2008年度）、埋蔵文化財保護対策委員会委員（2008年度～）を務められ、学会活動の発展にも貢献されてこられました。

教育面では、主に「文化人類学」、「日本文化論」、「観光資源論」等の講義をご担当いただきました。これら科目においては、古代社会における集団構成、集落形成を、発掘成果という貴重な実証成果に基づいて講義し、「集団」・「集落」といったものが如何なる諸要素から構成され、また、「社会」の原始的形態の理解を通じて、人文社会科学における基本的概念をその発生から着実に理解させ、現代社会を視る上で従来培ってこなかった視点を学生達に獲得させるとともに、歴史的な遺跡を観光資源の対象とすることの重要性やその仕組みについても理解させるよう努力してこられました。先生の授業は、ときにジョークを織り交ぜた、軽妙な語り口が有名で、経済学部の名物講義の一つでした。特に演習では、座学とフィールドワークの両方を実施した上で懇切丁寧な指導を行われ、演習生から厚い信頼を得てこられました。

社会貢献活動での業績は数え上げたら切りがありません。考古学分野での高い識見を活かして、「日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員」や「香川県文化財保護審議会会長」「香川県環境保護審議会委員」「高松市歴史資料館運営協議会会長」「丸亀市史跡丸亀城調査整備委員会委員」といった県や市の審議会委員をはじめ、かがわ長寿大学などの一般市民を対象にした講演の講師も多く務められ、積極的に地域貢献を行ってこられました。

管理運営面においては、学部で地域社会システム学科長（2003年度）と学生生活委員会委員長（2005・2006年度）を務められた後、全学では香川大学図書館・情報機構博物館長の要職を4年間務められました（2007～2010年度）。

以上のように、本学の研究・教育・社会貢献・管理運営の活動に多大な貢献をいただいた先生を、定年退職とはいえ、失うことは大変残念でなりません。在職中に考古学分野であげてこられた業績からすれば、退職されてからも先生には地域をはじめ様々な方面から要請があることは間違いありません。引き続きご活躍・ご健勝を祈念いたしますとともに、私ども後輩のために、今後ともご指導・ご鞭撻下さいますよう宜しくお願い申し上げます。